

II-P-537 認知症2型糖尿病患者の在宅でのインスリン導入にチーム
で関わって

大都千賀子¹, 菅原精一郎¹, 竹内 朋¹, 黒田 麻耶¹, 住友 秀孝²

ふくしま薬局¹, 立川相互病院内分泌代謝科²

【目的】 認知症2型糖尿病高齢患者, 日中独居でHbA1c10.5%に上昇し在宅でのインスリン導入となった. 保険薬局薬剤師・多職種がかかわることで注射を継続し低血糖をおこさずHbA1cをさげることが可能か? 【症例】 84歳男性 [2型糖尿病・アルツハイマー型認知症・心房細動・心不全・僧房弁閉鎖不全症にて弁置換術(平成4年) 高血圧症・脂質異常症・前立腺癌] 家族・多職種参加のサービス担当者会議にて, 日曜日以外注射見守りを行うこととした. 【結果】 在宅で導入を行い, 2ヶ月でHbA1cが6.2%にさがった. 【考察】 注射の見守りと自己血糖測定を行ったことで, 日中独居認知症患者でも注射を導入し重症な低血糖を起こさず, 継続できた. 不明な点は家族・他職種に速やかに密に連絡をとった. 本人・家族が医療関係者を信頼し受け入れる姿勢がベースにあったことが改善につながる大きな要素とも考えられた. [HbA1c: NGSP値]

リナグリプチン使用例の安全性評価

¹株式会社 地域保健企画 多摩薬局,²立川相互病院 内分泌代謝科

手崎 碧¹,宮本 千佳¹,黒田 麻耶¹,佐々木 敬子¹,山崎 英樹²,青柳 守男²,宮城 調司²,寺師 聖吾²,樫山 麻子²,住友 秀孝²

【はじめに】 2009年にDPP-4阻害薬が登場し、糖尿病治療において使用頻度が高まっている。特にリナグリプチンは胆汁排泄型の薬剤で腎機能低下者にも使いやすいため、当薬局では、年齢や腎機能に関わらず使用者が増加していった。そこで、本薬剤の使用実態調査から、安全性を評価した。【目的】 リナグリプチンの安全性を評価するため、使用患者の実態調査を行った。【対象・方法】 2013年11月から2014年8月までに、当薬局でリナグリプチンが処方された患者97例について、性別、年齢、BMI、併用薬、HbA1c、腎機能、有害事象の有無を調査した。対象者は、男性48例、女性49例、年齢35歳～95歳(平均69歳)、BMI17.5～36.9 kg/m²(平均26.1kg/m²)、開始時のHbA1c5.4～12.2%(平均8.16%)。服薬期間は最長42週。腎機能低下者(血清クレアチニン値が男性>1.2mg/dL、女性>0.9 mg/dLで判断)は42例(43%)含まれる。SU剤併用41例、インスリン併用25例、両者併用6例。【結果】 対象97例のうち、中止例は13例であった。中止理由は、効果不十分9例、HbA1c安定で治療終了1例、合併症で死亡1例、全身の紅斑1例、不明1例であった。合併症による死亡は末期の肺がんを合併している症例で、本剤の影響は否定的である。全身の紅斑については、抗結核薬によるTENの治療中に本剤を開始した症例で、皮膚症状が改善し、ステロイド減量中に本剤を服薬開始し、翌日に再び全身の紅斑が出現した。本剤のDLSTは陰性であり、紅斑の出現は本剤よりもステロイド減量の影響が強く疑われた。有害事象は26例(26.8%)で発現し、そのうち副作用が疑われた症例は12例(12.3%)で、内訳は低血糖8件(8.24%)、便秘4件(4.1%)、腹部膨満感1件(1.0%)であった。低血糖が起きた患者8例のうち、7例はSU剤またはインスリンを併用していたが、1例はピオグリタゾンとメトホルミンのみの併用であった。低血糖の症状は、いずれも振戦、冷や汗、倦怠感などの軽微なもので、重篤なものはなかった。低血糖が起きた患者8例中6例(75%)は腎機能の低下がみられる患者であった。年齢は46歳～83歳(平均66歳)で、年齢層に一定の傾向はみられなかった。【考察】 本剤による副作用が疑われる有害事象の頻度は年齢問わず少なく、重篤なものもなかった。本調査では、本剤の安全性が問題と考えられる症例はなかった。低血糖に関しては、SU剤またはインスリンを併用している患者で、かつ腎機能の低下がある患者は注意が必要である。また、SU剤やインスリンを併用していない患者でも低血糖が起こりうることを認識する必要がある。